

三ノ一八 小嶋山観覚寺縁起 清水寺草創に関する異説

解説

笠置寺に関する文献に大和小嶋山観覚寺縁起を挙げたのは清水寺の発祥に笠置寺の寺域が深く絡んでいると思われるためである。

笠置寺には代々、解脱上人の墓のある東山の谷（観音谷という）に流れ落ちる滝（千手の滝という）から清水寺本尊の観音が出てきたと言いつたといわれている。

一般に清水寺の草創については清水寺縁起などから

宝龜九年（七七八）小嶋山寺の僧、延鎮が観音の夢告によって長岡京より淀川にいたる。

ここで金色の水が流れている川を溯って、遂に山城愛宕郡八坂郷東山の上に分け入り、金色の水が流れ出でている滝に到る。滝の上に草庵があり、観音の化身である白衣の居士・行叡に会う。その遺命によって千手観音像を彫造、居士の旧草庵に奉祀したことに清水寺が始まると伝えられている。

その後、坂上田村麻呂が登山して、音羽の滝に導かれて延鎮に滝水の功德、観音の慈悲を論され、妻室と共に深く観音に帰依して子どもを安産した。後、田村麻呂が東征中、清水の観音を念じ、観音の化身、地藏菩薩と毘沙門天の応援をうけて東征を成功させた報恩に延暦十七年（七九八年）自宅の殿舎を寄進して仏殿とし、延鎮上人と同心合力して本尊に金色の十一面四十二臂千手観音、両脇侍に地藏菩薩・毘沙門天を奉造・安置したという。

一方その草創については、登場人物は同一ながら、その場所に異説がある。即ち延鎮の出所の大和小嶋山観覚寺縁起等によると

宝龜九年（七七八年）、観覚寺に住まいする延鎮が、木津川上流に観音の靈地があり、ここに住まいすべしとの行叡即ち観世音菩薩の夢告を受けて、木津川の流れを遡り、金色の流れの支流を上がってその水源に至り滝に辿り着いた。延鎮が辿り着いたその側に草庵があり、そこで久しく延鎮を待っていた行叡に行き会う。行叡は延鎮にこの地に住むことを言い渡して東方に姿を消した。

延鎮がここに住まいすること五年、時に延暦二年（七八三年）、坂上田村麻呂が奈良より鷹狩りにきて木津川東山で延鎮の草庵に至り延鎮に出会う。延鎮は田村麻呂の妻の病を加持の符により治したことから、妻はその自宅を寄付し当寺の仏殿とした。そして後に延鎮は洛東に観音寺を草創し、これを清水寺と名付けたという。

清水寺の正史では当然前者の清水寺系の草創説話が取られているが、地理的な説明からすると後者の説、まず笠置の山中に南観音寺が草創され、京都遷都によって京都に移ったという説が説得性に富む。

理由は

一、笠置山は古来山岳修行の霊場であり、山岳修行者延鎮の出向いた場所としてふさわし

い。

又笠置は実忠がその龍穴より兜卒の内院に入り、観音の十一面の悔過をもたらした観音の聖地である。

二、笠置寺東山は当時平城京に住んでいた坂上田村麻呂が、奈良を出発して木津川に到り、狩猟する山地として相応しい。天智の皇子の狩猟説話や笠置寺草創にも通ずるものがある。

三、観覚寺縁起にいう場所が全く笠置に相応しい。観覚寺縁起では延鎮が行叡に会うのが「木津川上方の観自在尊の霊地」と笠置寺を想起させる。笠置山から谷（今も観音谷という）を隔てた東山に千手滝が懸かっている。その上流に平地があり笠置寺の所有に属している。農地改革で手放す迄、稲作を行っていた。ここに坊があつた証拠とみて良い。笠置寺では古来より京都清水寺の本尊観世音菩薩がこの滝から出現したと代々言い伝えられている。ここに作られた観音堂こそ、坂上田村麻呂の妻が寄付して仏殿とした自宅（南観音寺）でないのか。そして後に田村麻呂が洛東に東観音寺（現在の清水寺）を草創し、これに清水寺と名付けたのではないか。

四、清水寺縁起では淀川に金の流れがあり、これを辿って山城国愛宕郡八坂郷東山の滝に到つたとあるが、京都、大阪の県境付近の大山崎で淀川は南から木津川、東北から宇治川、北から保津川が合流する。京都方面に溯る保津川は支流として東に鴨川を分けるが、この鴨川へ支流として東山周辺から清水寺を流れ下る顕著な川は存在しない。

これに反して笠置寺東山一帯は観覚寺縁起による木津川上流、滝、観音谷、すべてがこの縁起に地形的にも一致する。清水寺は笠置山東山にその草創を求める所以である。

五、宝亀十一年に坂上田村麻呂が余暇を得て都（平城京）を出て東山にて遊猟するが（清水寺縁起）、何故はるか京都東山まで行くのか。奈良の北東の笠置寺には天智天皇の皇子が鹿狩りにきた由緒があるではないか。当時既に霊山、深山として名高い笠置山を素通りして何故京都まで足を伸ばす必然性が存在するか、どうみても飛躍がある。

六、鎌倉初期に笠置山に入山した貞慶は建仁元年に東山観音堂修理勸進状を記す。この東山観音堂修理勸進状によれば、貞慶が入寺した頃には東山観音堂は既に破損していたため、貞慶はこの堂舎の修理を願って勸進を行った。貞慶の笠置寺入山は建久四年（一一九三年）で、その頃既に破損していた東山観音堂の完成年代は不明であるが、勸進状が現存する以上、その存在は否定し得ない。上述の通り、この東山観音堂こそ延鎮に係る観音堂とみて問題なからう。

貞慶は修理のなつた観音堂で谷を隔てて正面する弥勒像を遠望して弥勒信仰を深めるとともに、この聖地で観音信仰をも深めていった。ここは晩年、貞慶が笠置寺を出て補陀洛

山海住山寺で観音信仰を深めるに至った契機ともなった記念すべき場所である。

七、さらに鎌倉時代の笠置寺住侶であった宗性は貞慶の勸進で修復された観音堂をもって観音の靈地とした。宗性は東山観音堂の啓白文を草している（春華秋月抄奥書）。文暦二年（一二三五年）二月、笠置寺に暴漢が乱入して房舎が破損され住侶が殺害される椿事が起きた際も、東山に逃れてその後柳生経由で東大寺へ避難している。おそらくこの観音堂は元弘の役で焼失してその後は再建される事はなかった。江戸時代の絵図面にもその記載はない。前述のとおり、跡地は田となり、第二次大戦後は山林に戻っていった。

以上については、達日出典氏の奈良朝山岳寺院の研究（名著出版）による処が多い。

### 小嶋山観覺寺縁起

原文

和州高市郡子島山観覺寺報恩法師之開基也其地以子島邑号子島寺也報恩年十五歳而離家三十面入吉野山持観音呪而四五年之間早得靈威天平正寶四年帝不豫詔恩令加持帝病即愈桓武帝在長岡宮時嬰沈痾巫医萬方不効又詔恩令加持恩入宮中持観音大悲呪五十遍而宮中大動觀自在菩薩形於殿上帝疾立愈賞賜甚厚而潜反山帝詔内臣昇鳳輦追迎于路恩謝而不乘徒步而帰矣天平宝字四年二月和州高市郡子島邑神祠之畔建物伽藍安置一丈八尺観音像及四天王像号曰子島寺今改為子島山事見于下報恩之徒延鎮繼師業而居此寺宝龜九年四月八日夢中告鎮云汝信観音数年自是上木津川上方有観自在尊之靈地到此所可住居云々夢覺而不知其人鎮思惟仏説曰八月十八日観音有縁之日也然則観音所告也則往木津川沂流一支川有金色之流到其水源有滝水傍有草廬白髮老翁座焉鎮問何人哉翁曰吾名行叡雖補陀落之教主也為度生分身而此来也吾待汝久而汝来焉吾住此地七百歳為守護帝城利益衆生口誦千果焉汝可住此地也言終出行東方也鎮住于此五年于時延暦二年坂上田村麿自奈良出致木津川東山而放鷹致鎮草庵而問其行法鎮告持観音名号坂氏信其行且語其妻三誓長高子之病痾請鎮令加持鎮令其婦持観音之名号与加持之符高子病患速癒高子信悦而寄附自宅謂田村而成当寺之仏殿然後延鎮草創洛東観音寺名清水寺以子島山名南清水寺鎮北遷之後其徒相承而守此寺矣

読み下し文

（前略）

宝龜九年（七七八年）四月八日、告げて云う、「汝、観音を信ずること数年なり。是より上、木津川の上方に観自在尊の靈地有り。此の所に到りて住居すべし」と云々。

夢覚めて其の人を知らず。鎮思おも惟うに、仏説に曰く、八月十八日は観音有縁の日也。然れば則ち、観音の告げる所也と。

則ち木津川に往きて流れを沂る。一支川に金色の流れ有り。其の水源に到るに滝水有り。

傍らに草廬有りて白髪の老翁座す。

鎮問う「何人や」。

翁曰く「吾が名は行叡。補陀落の教主也と雖も、度生（衆生を濟度すること）が為に分身にて此に来たる也。吾汝を待つこと久し。而して汝来たる。吾此の地に住まうこと七百歳。帝城を守護し、衆生を利益せんが為、口に千果を誦す。汝此の地に住まうべし」と。言終わり、出て東方に行く。

鎮此に住まうこと五年、時に延暦二年、坂上田村麿、奈良より出て木津川の東山に致りて鷹を放つ。鎮の草庵に致りて、其の行法を問う。鎮観音の名号を持ちて告ぐ。坂氏其の行を信ず。且つ其の妻三善氏高子の病痾を語り、鎮に請いて加持せしむ。鎮其の婦をして観音の名号を持せしめ、加持の符を与う。高子の病患速やかに癒ゆ。

高子信悦して自宅を寄付し、田村に謂いて、当寺の仏殿と成す。然る後、延鎮洛東に観音寺を草創し、清水寺と名づけ、子島山を以て南清水寺と名づく。鎮北遷の後、其の徒相承じて此の寺を守る。

（下略）

### 清水寺縁起

大学頭明衡朝臣（平安時代中期）の貴族

抑昔有二聖人一名曰延鎮、蓋報思大師入室弟子也、六時三昧之行年久。弘法利生之願日積。着蘿衣、以出聚落、杖木又、以入山林、宝龜九年四月八日抖擻之次。尋到勝地、是則山城國愛宕郡八坂郷東山之麓也。翠嶺圍繞。自移炉峯之雲。瀑泉飛流。如倒銀漢之浪。溪辺有草庵之居。庵中有白衣之人。延鎮聖人問云。居士住此經幾年哉。名姓爲誰。年齡不審。居士云。名乃行叡。性在隱遁、心念大悲、觀音日誦、千手眞言、棲居此地。久避喧囂、露往霜來。齡及二百、言談未畢。居士忽失。延鎮驚事之希、悟地之靈勝。止宿庵中、練行瀧下、爰大納言坂上卿。遊獵之次。欲飲冷水、尋得飛泉、相會延鎮。殊以帰依。便占件地、可建伽藍之由。言約已畢。延暦十七年七月二日。延鎮聖人與坂大將軍同心合力。始奉造金色十一面四十手觀世音菩薩像、仮造宝殿、所奉安置也。号清水寺、又名北観音寺也。同廿四年。奏請寺地、永以施入。便以茲寺、為栢原天皇御願一矣。大同二年。厩相宗室三善命婦壞運寢殿。建立佛堂。康平七年八月十八日焼失。同十一月二日造畢云。

### 東山観音堂修理勸進状

讚仏乗鈔（金沢文庫所蔵）

この東山観音堂修理勸進状によれば、貞慶が入寺した頃には東山の観音堂は既に破損していたため、貞慶はこの堂舎の修理を願って勸進状を記した。

笠置寺沙門某敬白

請蒙諸衆助成修理当山千手觀音堂舍破損狀

右功德善根其道雖多修  
理堂舍利益尤大也  
三宝住世為本之故也  
依之昔羅漢過洛見  
一貧兒其寿已尽殘  
僅三日其兒以木葉

必照其志二世善願何  
望不滿且報先師恩且  
謝父母德小僧以之願  
為人身之貯是一山之  
悦六道之助也仍勸進如件、  
建仁元年五月日

御眞筆草本書之

戲作堂形延寿六十  
年、又余地国王修理古  
寺得寿三十年又昔  
有人造堂傍人施一  
石以為礎依其功德即  
生天上堂壞之耕田  
主人掘石欲捨爾時  
彼天人所住宮殿忽震  
動天即下人間與宝  
買石重造彼堂然則  
貧子所作木葉雖怪  
能延寿命国王福力修  
造雖易猶為大善施  
地上之石尚成天上之果  
報加藏中之宝定遂  
淨土之往生爰我山者  
天造靈像權者留聖  
跡一天之下四海之中名所  
之靈地也其東山峯上  
有往古堂舍安置白檀  
千手觀音故老伝云齧  
父惠之所造也但未知定  
說而建立年古破損同  
久仏像欲朽悲而有余  
某宿縁令然雖及伝領  
金無依姑不能修造若  
信心之人有御助成者以千  
手定摩其頂以千眼

弥勒如来感応抄第一奥書 宗性

文曆二年二月八日酉時於笠置寺東谷房抄之畢、  
抑宗性自去寛喜二年之秋不図參籠此靈地以降深馮  
慈尊之引接偏樂兜卒之往生之間常卜当山幽閑之居  
專祈後世得脱之旨其中去年青陽之始当山居住之時  
慙發檢訪經論伝記章疏之説抄出弥勒如来感応之文  
之願兼以祖師上人御製作為本弥勒讚嘆之私記兜卒  
業因之略抄等広写諸本欲録一帖之処同二月十四日  
之朝惡党数輩乱入一山破損房舎殺害住侶畢爰宗性  
眼前見彼惡行懷中持此双紙先陵東山暫息楊生之里  
後赴南都再還華嚴之室其後当山稍不静去年空過之  
而今器界漸復其本住侶多集此処之間重抽慙歎之誠  
亦勵抄出之勤今此一帖抄所結集訖也此中觀兜卒記  
之外皆是祖師上人御草案也每拜見信仰之淚浮眼每  
誦誦隨喜之思銘肝矣是末代之要書後学之重宝者歟  
志之所之不可不集仰願依其誓願答此微功知足天之  
雲上必遂上生内院之望鷄頭城之華下遂結下界值遇  
之縁凡厥生々父母恩愛之類世々同法知識之輩俱蒙  
大聖慈尊之引接同開中道唯識之惠解矣

右筆笠置寺住侶沙門宗性

(傍線は編者)

春華秋月抄 第一 (三帖ノ内) 宋性

(宋性笠置寺觀音堂記奥書)

記置笠置寺東山觀音堂之詞已下、貞永元年十一月上旬之比、於笠置寺福城院興円定連房之  
住房、草之畢